

●求められる対策の強化

現在、我が国の鳥獣による森林被害の約8割(面積比)がニホンジカによるものです。その被害は、単木被害にとどまらず森林の生態系を脅かすほどになっており、生息域の拡大や個体数の増加が予想されるなか、更なる対策の強化が求められています。

●アカデミーの人材育成

こうした状況の中、アカデミーでも森林被害対策に必要なスキルを学ぶための授業を設定し、担い手の育成に取り組んでいます。



ツリーシェルターが施された新植地の見学風景
シカ対策では、ツリーシェルター(単木防護資材)のほか、防護ネットや忌避剤等も使用されます。森林では、対象面積の広さや地形条件、アクセスの悪さに加え、積雪等の影響もあり、対策が難しいことを学びます。

●「野生動物捕獲実習」30時間
この授業は、わな猟等の狩猟技術や防除技術の習得を目的としており、実習によりわたの設置や獲物の取り扱い、防護ネットやツリーシェルター設置方法等を学びます。また、狩猟免許の取得もこの授業の中で支援しています。



「森林獣害」授業風景
頭骨標本や足のはく製等を用い、加害獣の生態や被害の特徴を学びます。前列手前からニホンジカ、クマ、カモシカ、後列イノシシ

●「森林獣害」30時間

この授業は、森林獣害に関する基礎知識の習得を目的としたもので、被害の現状、加害獣の生態、防除対策、関係法令等について学びます。

●「野生動物捕獲実習」30時間

現在、これらの科目は、クリエイター科を対象としています。次年度は、エンジニア科にも科目を新設する方向で検討を進めています。

● ロッテンブルグ大学での教育
学生達は、これらの授業の他、岐阜大学で開講される野生動物管理学講座や県、猟友会等が主催する講習会等にも参加し、学びを深めます。

● ロッテンブルグ大学での教育
昨年十一月に、ロッテンブルグ林業大学から教授陣が来校され、狩猟や森林獣害、教育プログラム等について情報交換する機会が得られました。日本とドイツでは、銃や狩猟に関する文化や制度が大きく異なる一方で、森林獣害や狩猟者の高齢化など双方の課題は驚くほど共通していることがわかりました。また、教育プログラムは、狩猟がフォレストに必要不可欠なスキルとされていることもあり、より充実した内容で授業が行われているようです。これらについては、引き続き情報交換をしていくことになっており、この授業の充実を求めていきたいと考えています。

岐阜県立森林文化アカデミー 教授 ●伊佐治 彰祥

「森林獣害対策」
森林文化アカデミーの担い手育成

●終わりに

今後、森林獣害対策や狩猟に関する知識・技術は、森林技術者にとって外せないスキルになると考えます。アカデミーの学生達が、必要な知識、技術を身に付け、頼れる森林獣害対策の担い手として巣立ってくれることを願います。



狩猟儀式風景
捕獲された動物を悼み、狩猟ホルンが吹かれる。曲は獣の種類ごとに決められているとのこと。捕獲された動物は、右側を下にして横たえられ、オスの口には、枝を咥えさせる。こうした狩猟文化が授業をおとして伝えられる。



狩猟学実習風景
ドイツでは、銃所持が日本より容易で、初心者でもライフルを所持することができる。一方で、狩猟免許の取得は日本より難しい。また、くくり猟は、動物福祉の観点から、禁止されているとのこと。